

三浦 二郎



千歳川放水路という
化け物の正体は
なんだろう！



美々川源流部風景

一、苦小牧市民の意識は？

二月十八日、心配された雪雲の去来が見られない苦小牧特有の冬の夜空を見やりながら会場の苦小牧市民会館に、定刻より三十分ばかり早目につく。既に「考える会」の若い会員が、会場設営のためにかがいしく立ち働いている。

「考える会」としては、創立総会を含めて三回目のイベントである。第二回目は、放水路によってまともに生産活動に大きな影響を受ける苦小牧市の東側、東部工業基地に接する酪農地帯である美沢・植苗地区の、植苗福祉会館で十一月十二日「千歳川放水路が農業に与える影響を考える集会」を開催した。この集会は、講演会形式をとり、日本科学者会議北海道支部から北大工学部教授神山先生、農業先端技術研究会理事の小高先生のお二人からそれぞれの専門的な立場から工学的、農業気象学的な講演を頂き当協会々長八木先生からは、自然の水の流れ——千歳川は北流して江別太で石狩川に合流している——を逆流させるといふ、自然に逆らう工法をとること

は思わぬ災害を起しかねないと、自然の摂理をふまえた自然保護の立場からのお話を頂いた。地区の農家全戸からの参加があったし、やや悪天候であったにもかかわらず熱心な一般市民の参加もあって、予想以上に盛会であった。

しかし、放水路が開削されれば、農地の分断、地下水の低下による農業用水の確保困難、海霧侵入と川霧発生による気温低下等の悪影響をもちに受ける東部農業地帯で、放水路に対する強い懸念をいだき関心が高いことは当然であるが、果して市街地に居住する大多数の一般苦小牧市民の関心はどうだろう

か。特に苦小牧市の西端樽前地区に居住している身にとつては、充分には測り知れないものがあつた。第三回目のイベントとして「千歳川放水路と生活を考える市民集会」を計画するに当って、少し冒険かなど危惧しつつ、市街中央に位置する市民会館を会場に設定することを強く主張した。「考える会」の幹事は会場確保と参加団体への働きかけを精力的に推進して当日を迎えたのである。

一般参加者はせいぜい六七十人であろうというのが幹事会での見積りであつたのだが、開会十分前頃から続々とつめかけ、受付の女性会員がでてこ舞いをする状況で、その後も参加者は増えるばかりとうとう一旦開会を宣したあと、一時中断して急換補助席を増加する仕末になり、会場は百五十名の参加者であふれる有様となつた。千歳川放水路問題に対する苦小牧市民の関心を改めて思い知らされたものである。

「考える会」の活動が一般市民に理解されてきたとうぬぼれるつもりはない。何せ資金も何もない、通信費程度の会費だけで「放水路はいらない！」をタイトルにした会報を二回、それに「我らが大地を永遠に」のチラシを作つたら、そのチラシは会員の足で個別に手渡すしかすべのない宣伝活動だけで、これ程多くの一般市民の参集を得られるものではあるまい。漠然といたいていた放水路に対する不安や疑問を何とか解明したいという意欲が、市民の足を会場の市民会館に向かわせたものと判断するのが妥当であろう。

出張用務のため遅参の予告のあつた神山先生が、受付がまだごつた返している時間に早々とおいでになり、心強い限りであつた。他の講師の方々も既に時間前におそろいになつていた。

二、放水路と沿岸漁業

「考える会」のチーフ幹事の綱島君から開会が宣せられ、先ず会議のため出席不能になつた苦小牧漁業協同組合青年部からのメッセージが披露された。苦小牧漁協は、かつて王字製紙工場からの廃水による補償交渉によつて涙をのんでそれに応じたし、苦小牧港掘り込みによつても撤退を余儀なくされた苦い歴史を背負っている。

拙宅は樽前ガローのほとりに構えているが、この樽前川の河口付近の昔日の模様を、松浦武四郎はその著「東蝦夷日誌・参編」の冒頭に、

「此邊は皆南受の暖地にて、沙濱浪打際より上に(二三丁)路有、躑く石一ツなく、鯛屋左右に立並び、酒肆・茶店もさまざまの暖簾さげ、中々に言さへぐ蝦夷人の里とは思はれず。其繁昌いはん方なし」と描写している。勇払館を更に東進し、勇拂では会所があり「産物は鯛八分、鮭二分、鹿皮多し」と記録している。往時は、大きく湾曲した海岸線は日高山系から供給される砂礫が千島海流によつて運ばれその細砂が堆積した砂浜海岸を形成し、安全な好漁場となつていたものであろう。秋には、流入河川のいづれにも、鮭・鱒・シシャモ等が産卵のため遡上して、豊漁の浜であつたことが偲ばれる。しかし、今は沿岸漁民は工業化と開発の波におし流され、細々とした漁獲を強いられ、往時の盛漁は再び期待できない状況に追いやられていのである。放水路開削はその状況に追いつちをかけるようなもので、アピールは開削による汚泥土砂によつてカレイの産卵場を汚染し、サケ・シシャモの遡上を阻害すること等に強い危機感をもち、再起のためのホタテ養殖事

業の推進ができなくなると不安を訴えたものであった。

三、放水路と農業

「考える会」代表の私から、六十三年度道開発予算に八億円の着手予算が次官折衝によって復活して計上されたという局面を迎え、開発局に対し、誰もが納得できるアセスメントを要求し、その結果によってはこの計画を廃案に追い込むように努力しようという趣旨の挨拶をした後、各演者からの発言に移ったのである。

まず農業生産者団体である苫小牧市美沢、植苗地区酪農組合代表の五十嵐氏から、前記した當農に対する不安と、過日二月三日市役所で開催された開発局の説明会に出席した経緯の説明がなされた。この組合は、開発局の当初から想定した東ルートの隠密な測量のやり方に反発し、開発局の説明は一切受けたくないという態度を堅持していたものである。前回の植苗福祉会館の集会でも「説明を受ける」と、開発局側から「農民の皆さんの理解を頂けた」という口実を与え既成事実とされるので、これまで一切の説明を拒否しているのだと、したたかな農民魂を聞かされていたものである。今回は市当局の仲介によって、説明会に参加したが、「説明は聞くだけ」という態度で出席し、一切の質問も出さず席を立った由である。

市当局がどうして説明会の開催仲介をしたのか不可解である。この説明会に先立つ二月一日には「考える会」を代表して市長及び市議会議長に対して四点について要望書を提出したばかりなのである。も

つともその第三点目に、

「関係住民、地元自治体、議会の了解なしに、アセスメントに入らぬよう開発局に強く働きかけること」とあったので、関係住民としての美沢・植苗地区住民に説明を受けさせようと努力したのほうなづけられないわけではないが、吾々の感情としてはすつきりしないものを残した感がある。しかし、少くとも「納得了解して頂いた」という口実を、開発局側に与えなかつたことは立派なことである。

放水路を考える恵庭市民の会の新谷氏が次に立つて、放水路計画賛成派が主流を占める恵庭市にあって、この放水路は決して恵庭市の洪水解消には役立つたないものであると、反対運動を展開している状況の報告があつた。新谷氏は昨年九月十二日札幌市北農会館で開催された日本科学者会議道支部の「千歳川放水路問題シンポジウム」の席でお見かけした方であり、非常に精神的にこの問題にとり組んでいる状況の報告であつた。この会の発足は、一農民の素朴な放水路に対する疑問がきっかけとなつてのものであるという。

石狩の穀倉地帯は概ね恵庭市から始まって長沼町南幌町へと拡がっている。この地帯は、低地盤で洪水の常襲地帯でもある。従つて洪水対策の確立は渴望するものがある。しかし、昨年八月二十一日胆振・石狩地方を急襲した集中豪雨の際、実際にこの地域沿いに車を走らせて視察した限りにおいても、千歳川や石狩川そのものの流量は平常と殆ど変化がなく増水しているとは見えなかつたにもかかわらず、この地帯の田畑冠水は二千余ヘクタールにも及んでいる。これはもともと低地帯であるからで、たとえ千歳川放水路が完成しても、この地帯の田畑冠水の(住宅を含めて)排除には有効に機能するとは考え

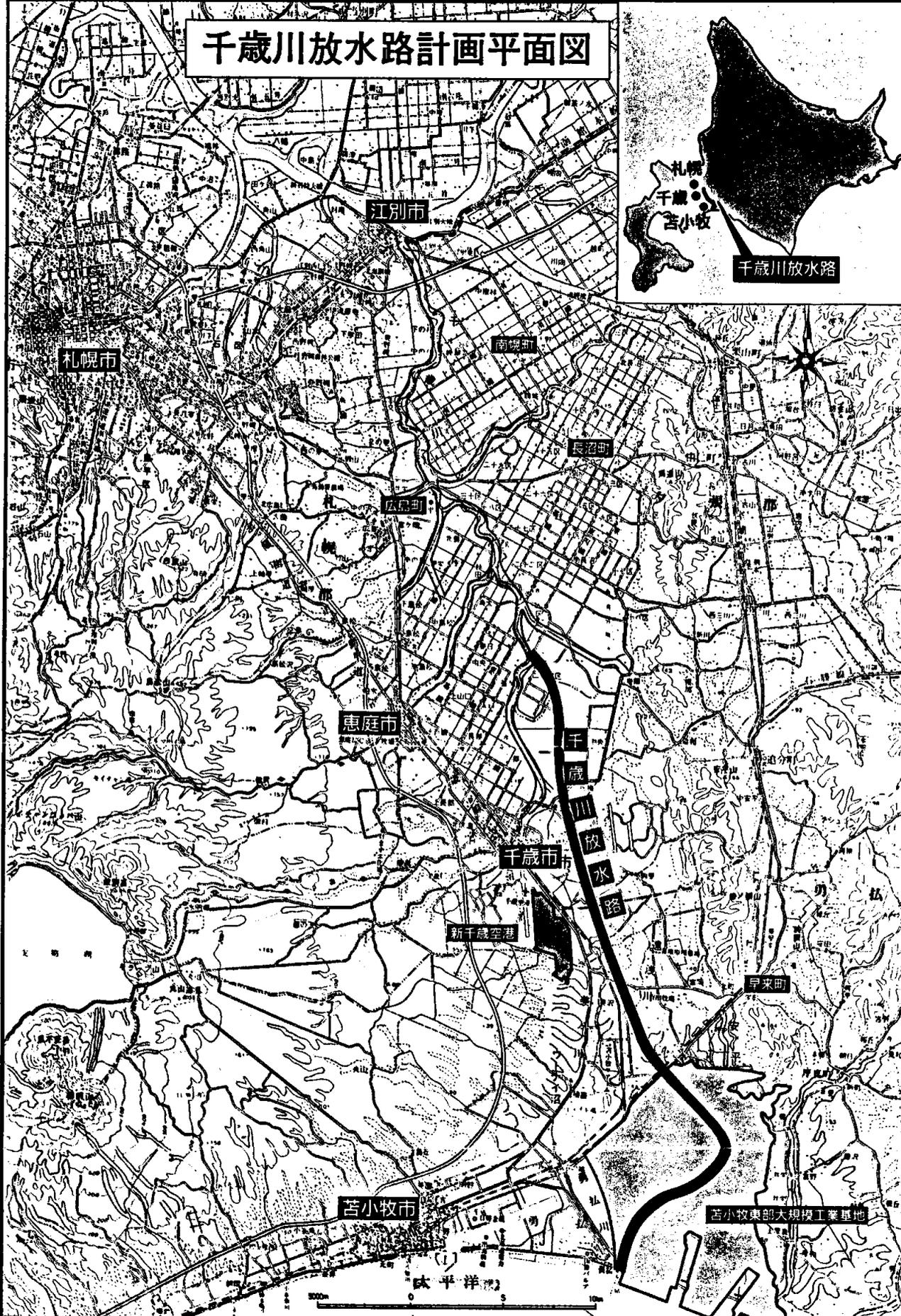
られないことである。

日本は「豊葦原ノ瑞穂ノ国」とされ、もともと低湿地帯の葦原に水田を開拓して稲作中心の農業を確立した歴史をもつ。北海道では寒冷のため、熱帯性植物であるイネの栽培は不適とされ、イネ栽培は禁止されていたが、開拓農民の「自家飯米はせめて自分の手で」という願望とためめ努力によって寒地稲作を成功させたものである。しかし温度指数の絶対条件によって、稲作適地は日高山脈以西に限られ十勝内陸、北見内陸部に僅かに飛び地として栽培されているのが現状である。

しかし、全国的な米余りと「寒冷地稲作不適論」の横行によって減反転作を強いられ、道内の水田耕作面積は次第に狭められてきた。転作水田には稲に替つてタマネギ等の野菜やメロン等の果菜が栽培されるようになってきた。これが北海道農業、特に低地農業にとつて重大な不幸をもたらしてきたのである。というのは、イネの場合冠水日数が少々長びいても水が引けば復活できるのに、イネ以外の作物は一旦冠水したらそのダメージから立ち直ることができず、洪水にあえば決定的壊滅をもたらすのである。また、水田は洪水時の遊水池と機能していることも見逃せない。そして、かつてのナイル川流域と同様、洪水によって地味が豊かにもなるのである。農民はよくこのことを知っていて、洪水と共存する術を心得ているのである。この地帯の住宅については高床式構造を助成する手当がなされれば、洪水時の被害を最小限とすることができるはずである。

長沼町では、地域活性化の一環として、馬追山を中心とした大規模リゾート開発を計画していると聞く。かつての馬追山保安林解除によって夕張川水系や嶮淵川の氾濫がこの地帯の洪水を助長しているの

千歳川放水路計画平面図



を、更に追いうちをかけるようなものではないか。

広島町もまた然り、ゴルフ場新造成禁止を解除すると聞く。いずれも石狩川治水対策をますます困難なものとする措置ではないか。かつて長都沼を埋め立て、重要な遊水池を失った愚を何ら教訓とせず、千歳川放水路だけが石狩川治水対策のベターなものであるとする開発局の宣伝はまさに欺満そのものではなからうか。

後から報告に立った恵庭市民の会の村本氏から、農民の中には「農地を遊水池として開発に買い上げてもらおうか」と蔭でつぶやく者があるということである。仄聞したことだが、開発局の説明の時、「農業のことはあまり考えていない」という農民切り捨てとも受けとられかねない発言があったという。貿易自由化の波の中で、開発側の意識の中に、農業軽視の意識が現われたものであろうか。開発局が計画した農地造成事業が各地で返上されつつある趨勢がそういう意識づくりに働いているものであろうか。

四、放水路に対する労働団体のとりくみ

苫小牧地区労の田村書記長からは、地区労としては、千歳川放水路計画には基本的に反対の決定をしたという報告があった。地区労では昨年七月十七日に、神山教授を招いて「千歳川放水路を考える学習会」を独自に開催し、私も傍聴したが、その時既に反対の意識づくりがなされたもので、地区労という大きな組織が強固な意志決定をしたことは、本当に心強い。苫小牧地区労としての開発に対する運動の経過は、苫小牧港掘削事業に対しては、労働力の需

要拡大という労働運動のメリットから賛成したが、苫小牧東部工業基地建設については、巨大な自然破壊を伴う開発であるという見地から反対したということである。現在開発された苫小牧工業基地には、僅かな企業の進出があっただけで、その後の企業進出はストップしたままである。しかも、千歳川放水路は、折角造成した工業基地を分断することになり、今後の企業進出をますます期待薄にし、労働力の拡大は望めなくなるのであるから、地区労としてもこの計画をおいそれと容認できるものであるまい。

私は根室管内で勤務している間、苫小牧工業基地と石狩湾新港と共に、三全総の北海道開発の三大プロジェクトとされた根室中部新酪農村建設に直面していた。「もうかる酪農」を標榜して推進されたその事業は、事業完了とされた昭和五十九年春には、開発局職員の大量異動と、農機具業者の大量転出によって大幅な人口減となり、農民には一戸当り約一億円の負債（この事業は農地の建て売り方式がとられ、当初入植者は三千万円の自己負担とされていたのだが）をかかえさせるだけの結果となったのをこの目で見ている。北海道における三全総の三大巨大プロジェクトが生み出したものは、かくの如きである。放水路という巨大開発は一時的な雇用促進にはなっても、地域定着型の労働力とはなり得ないのであるから、地区労のこの方針は賢明な選択であったと、後世に評価されるであろう。

五、放水路に対する地元自然保護団体のとりくみ

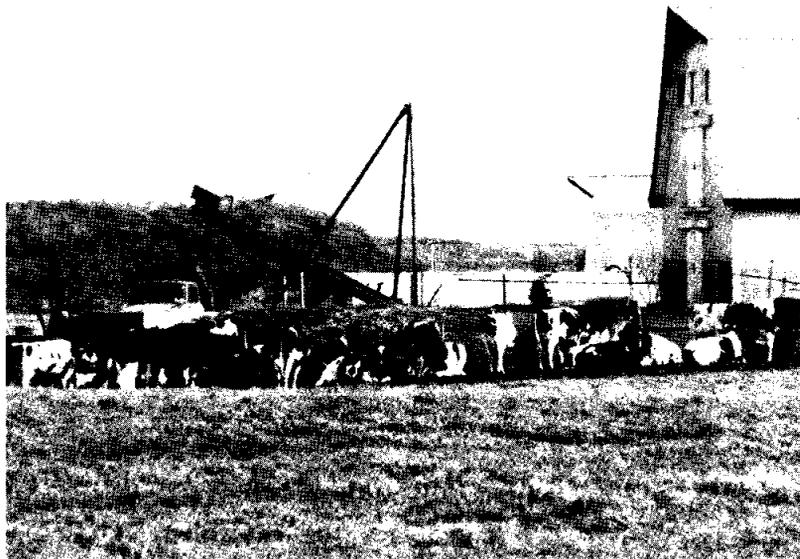
苫小牧自然保護協会は、苫小牧港の掘り込み土砂

による埋め立てが明野地区でなされ、そのためにアオサギのコロニーが次第に衰退して行く状況を憂慮した苫小牧郷土文化研究会の有志によって昭和四十七年に結成されたものである。勿論その当時既に苫小牧工業基地の建設も始められており、苫小牧周辺、特に東部地域の自然環境保全に危機感をつのらせた有志によって自然発生的な結成であったと思われる。その活動のシンボルがアオサギコロニーの保護であり、(財)日本野鳥の会の第一号サンクチュアリ建設がウトナイ湖畔に決定した段階で、日本野鳥の会苫小牧支部も結成され、アオサギ保護は苫小牧支部に引き継がれ、ウトナイサンクチュアリのシンボルバードはこれまたアオサギが選定されたのである。こういう流れの中で一貫して中心となって活動した紀藤氏から、二つの団体がとりくんできた、放水路計画がウトナイ湖を中心とした自然環境の破壊につながるという見地からの反対運動の経緯が報告された。特に、八月二十日東京で野鳥の会が開催した「ウトナイ湖を守る緊急アピール集会」のあと、開発庁、建設省、環境庁、大蔵省に要望書を提出した時の、開発庁河川課長の対応について、憤りをこめた報告がなされた。要望書は開発庁が昭和六十三年度予算に千歳川放水路着工予算の要求をしないでほしい、要求があっても査定段階で認めないでほしいという趣旨のものであったが、開発庁河川課長の応待は、「霧の発生や地下水の低下等心配されておられるように云い方であった事である。この場には私も同席したのであるが、放水路によって新しい自然環境ができるのだから、その新しい自然環境をうまく利用したらよいのではないかと云わぬばかりの口ぶりには、呆れて口がふさがらない思いであった。

ウトナイ湖、そして美々川、勇払川を中心にした
 広大な湿原は、約三万九〇〇年から三万年前に噴出
 した支笏火山の火砕流が旧石狩川の流れをせき止め、
 河流を太平洋から日本海に変えて以来、その火砕流、
 火山灰層の上に営々と自然の力で形成されたもので
 ある。北海道の湿原を形成する泥炭層の形成は、一
 年に僅か一ミリであるとされている。その形成は気
 の遠くなる程のサイクルであり、その形成過程には
 さまざまな自然の営みのドラマがあり、またその自
 然と関わった人間の歴史があった筈である。その何
 万年、何千年の歴史を刻んだ湿原を、一本の放水路
 で干上らせて、新しい自然環境を作るといふ人間の
 傲慢が許されてよいものであろうか。

湿原を不毛の、無用のものと考えた感覚は日本人
 にまだ根強い。石狩湿原は見事な排水事業によって
 農地になり、そして市街地となっている。しかし今
 残されている湿原については、湿原そのものを、人
 間生活を支える貴重な自然環境としてとらえ直す必
 要があると思う。そこに湿原特有の動植物が生息生
 育しているから保護してやるべきだという観点から
 だけではない。湿原を曲流する河川は、湿原のフイ
 ルターによって常に浄化されて清浄な水を供給し、
 海に注いで汚染を防いでくれているのだし、人間の
 生活域と自然がひそめている危険とのクッションに
 役立っていることを見逃せない。もっと直接的に云
 えば、北海道における人口集中域である札幌圏の安
 全が、この地帯の湿原によって保障されているとい
 って過言ではない。それに、最も心配される海霧の
 侵入が放水路沿いに新千歳空港に及ぶのは目に見え
 ているし、更に札幌圏に湿舌を伸ばし、市民の生活
 に悪影響を及ぼすであろうことは十分に予測できる。
 このことは、道東に生活した年数の長い私の体験か

ら確信をもって云えることである。釧路の海霧は、
 海上で発生すると釧路に上陸した後、足早に釧路川
 の水路を北上し、標茶、弟子屈に侵入して行く。厚
 岸、昆布森、白糠のように海岸近くに山地が迫って



放水路予定地附近の酪農地帯

いると、海霧は山の森林に阻まれて侵入の速度は鈍
 るし、それらの地域の内陸部は霧の影響はよほど薄
 れたものになる。根室地方でも事情は同じであった。
 幸い根室地方のすべての河川は、海霧侵入経路と直

角になるように東流しているの、河川沿いの海霧
 侵入は顕著ではなかった。

六、放水路にかわる背割工

日本科学者会議道支部からは国府谷氏が千歳川と
 石狩川の合流点で背割工を設置して洪水被害を軽減
 することの施工に力点をおいてその効果予測を提言
 して頂いた。水系の洪水対策はその水系で処理する
 のが大前提であるという立場での提言である。

背割堤は木曾川・長良川・揖斐川で既に効果をあ
 げているものであるが、千歳川の場合は背割堤ほど
 の規模は必要でなく、鋼矢板の打込みで充分であろ
 うということ、背割工として提言された工法であ
 る。ところが開発局側では、そのようなものでは洪
 水時の水圧に耐えられないとか、地下に打込む長さ
 の鋼矢板はないとか、引堤を拡張しなければならな
 いからとか、真剣に取り組もうという姿勢がなく、
 遮二無二千歳川放水路一案にこだわっているよう
 である。国府谷氏は工法的な可能性を納得できるよ
 うに解説された。素人判断でも、潮流うず巻く瀬戸
 の海に橋を架けるだけの日本の技術で、背割工程度
 のものを作る技術にこと欠くはずはないのである。
 背割工とは、千歳川と石狩川との合流点に二つの
 流れを分流するように背割りすることによって、
 洪水時に石狩川の水流が千歳川に逆流しないように
 しようというものである。五十六年の洪水時には石
 狩川上流で刻印された木材が、千歳川を遡って？
 水が引いたあと田んぼの中にでんと横たわっていた
 という。この石狩川の逆流を放水路によって四〇数
 軒を導いて太平洋に放水しようというのが放水路計

画であるが、その呑み口が図に示されてあるように千歳川が北流しようとする水流を無理に曲げて南流させようとするものである。洪水時には、江別太の石狩川との合流点の締切水門を閉じ、大学排水、十四号排水を拡幅した地点の呑み口水門を開いて放水しようとするもので、かなりの無理があり、水門閉閉のタイミングによっては、両水門の間の洪水が滞留しかねない危険性さえはらんでいる。その点、背割工が設置されれば、石狩川と千歳川は分流され、両方の水位が一致した地点で合流しスムーズに洪水を処理することが可能となるのである。

勿論、背割工だけで洪水被害を一挙に解決できるものでなく、石狩川河口部の放水路開削や遊水池の設置等、石狩川水系での総合的政策が必要であることは云うまでもない。

本協会々々八木先生からは、十一月二十日に自然保護団体を代表し、大蔵省主計局に千歳川放水路着工予算の中止を申し入れたところ、当初予算では一応見送られたにかかわらず引きつづく次官折衝により、八億円が復活した経緯の報告がなされた。つづいて、利根川のもととの河口は江戸川であったのに、現在の銚子口にまで延々と河流をかえた、利根川東遷の歴史をふり返ってみても、さらには遠くナイル川の治水工事業を見ても自然の改変がどれ程大きな影響があるかを教訓にすべきであると説かれた。また、農業の専門家の小高氏からは「冷害と水害はどちらがこわいか」という問いかけがあり、環境遺跡を守る会の須貝氏からは静川環壕遺跡のある高台下を放水路が通ることについての危惧が警告された。正味三時間半の集会で、八つもの各組織の代表の方からの提言・報告を頂いたわけで、それぞれの持ち時間も制約されて、云いたいことの十分の一も述べ

べて頂けなかつた失礼があつたが、参会者にとつては充分に問題意識をもってもらえたと思う。最後に次のアピールを採択して散会した。

アピール文

北海道開発局は、関係住民・苫小牧市・早来町及び両議会の意向を無視し、千歳川放水路計画について関係者の理解も得られていない中、昭和六十三年度予算において用地買収費を含む着工予算を計上しました。

この千歳川放水路計画は自然の摂理に反すること、治水対策に対して根本的な疑問があること、営々と築き上げた豊かな農地や酪農地帯を奪いとることや美々川やウトナイ湖を始めとする貴重な自然環境を破壊すること、千歳川を母川とするサケ・マス等への悪影響や苫小牧沖のホッキ・ホタテ等の漁業資源に対する不安、霧や地下水への環境変化や自然の生態系の変化に対する問題、発生する多量の土砂問題、苫東基地の分断、地盤沈下の危険性、など多くの問題が指摘されているのです。これらの問題に対して開発局は責任を持って、関係住民に納得の出来る答えを出すべきです。

大規模な自然改造であるとともに、多大な犠牲の上にしかり立たないこの千歳川放水路計画を見直し、石狩川水系で背割工を中心とする総合的治水対策を行うことを開発局及び関係機関に強く要望します。

昭和六十三年二月十八日

千歳川放水路と生活を考える市民集会

参加者一同

七、開発局の地元住民に対する説明会

翌十九日には、苫小牧市勇払地区住民に対する開発局の初の説明会が開かれた。私は上京のため顔を出すことはできなかったが、新聞報道によると、地区住民約百人が集まり、放水路建設による影響を懸念する声が続出、更に「放水路計画は昨日今日に始まったのではないのに、われわれに今日まで説明がなされなかつたのはなぜか。住民感情をどう考えているのか」という不満も爆発し、この説明会だけでは納得が得られず、四月に再度説明会が開かれることになったという。

私は二十・二十一日東京渋谷で開催された勸日本野鳥の会全国代表者会議（理事会・評議員会を兼ねる）に出席し、全国から参集した代表者諸君に対してウトナイ湖サンクチュアリをかかえる苫小牧支部長を代理し、着工予算が計上された段階でウトナイ湖サンクチュアリが危機に直面していることを訴え、

- 1 千歳川放水路計画書及び調査結果の公表（特に美々川、ウトナイ湖に関する部分）
- 2 美々川、ウトナイ湖への影響及びその保全策の明示
- 3 放水路全体の模型実験と放水路の対案である背割工法の模型実験を行ない、どちらの方法が適切なかを比較検討すること。

（千歳川放水路の根本的見直し）

特に3の模型実験は、八億円もの着手予算の中で充分な実験をやることを要求したので、全国代表者会議の名をもって開発局及び関係機関に要請することの承認を得たいと提案し、承認された。

八、放水路の正体は？

千歳川放水路の規模を、大まかに述べると呑み口水門から安平川河口（勇払川河口も河口は共通）まで三八・五料、掘削土量は一万一二〇〇立米、放水路幅は呑み口付近は二五〇米、河口で四五〇米、平均して四〇〇米、駒里丘陵では三〇〇四〇〇米の深さで掘削するというものである。このことによつて、河口部では海面下三米まで掘り下げることになる。（勾配がゆるい地形なのでそうなる）。ということ

は当然海水が内陸深く浸入するというので、洪水でもない限りこの海水は内陸に滞留し、腐水となつてよどむことになる。河口には潮止堰が設置されることにはなるが、海水の浸入は堰では完全にシャットアウトすることはできない。私は利根川の潮止め堰を見たことがあるが、その巨大さに驚いたものである。この堰堤工業者は、苫東基地に進出している。この業者は、九州の業者で、日本では唯一のものとして聞いている。放水路事業の施工者は、本州・九州の大企業が独占し、地元経済に対するメリットが少なからうという予測は、この一事を見ても明らかなことである。

そして、勇払沖合いにコースタルリゾート計画なる企画も動き始めたようである。これは掘削土砂によつて埋め立てた人工島をリゾート基地として造成しようというものであろう。

このような放水路事業と関連づける企画は、これからも目白おしに出されてこようと予想されるが、本当の意味での苫小牧市民の生活や産業を向上させるものかどうかは、よほど目を凝らさないと、見極めが困難となるであらう。目先の利益を求めて、蟻

が砂糖にたかる類いのものが多々ありそうである。

さて、先程、放水路計画のあらましを述べたが、川幅の平均四〇〇米という川は、そのままでは常時は浸入した海水がよんだ腐れ川でしかないことになる。百年に一回予想される洪水対策のための放水路であるとすれば、あとの九十九年は腐れよどむ腐れ川として放置するものであろうか。

その本当の正体は何なんだろうか。着工予算が計上されたといっても、まだ一畝も打ち下ろされていない今の段階で、その正体をすっかり見すえておかねばならないと思う。

放水路によつて直接影響を受けるのは、早来町や苫小牧市東部酪農地帯の農民だけ、という甘い認識ですまされる問題であらうか。

かつて戦前の遠い昔、昭和十四年末、時の北海道長官戸塚九一郎が道議会で「苫小牧と石狩を結ぶ運河」のいわゆる戸塚運河構想をうち出した。この運河構想の手始めに、昭和十六年全国の大学生二七〇人をあつめて、掘削工事を開始し、それが今いわゆる「大学排水」として残されているものである。

戦前の亡霊のような運河構想が、この放水路計画に復活しているのでないかと疑ってみる必要があるはしまいか。放水路掘削工事に要する年数は二十年と見積もられている。その間に現在の交通、物流体系はどう変化するか予測されない。千歳新空港のエアカーゴ基地、或いは札幌―千歳空港―苫小牧を結びニアモーター化も話題にのぼっている。今頃運河でもあるまいと云われそうだが、開発局で作成した色刷りパンフレット「オアシスライン」には、ちゃんとヨットが浮んでいるではないか。まさか腐れ水の上でヨット遊びなんかできっこないやなんてせせら笑っていると、ピッチと鼻毛を抜かれかねな

いのかも知れない。

今、私は根室管内で十二年にわたつての自然教育運動の歩みを、自分なりに整理しようと謄写印刷したものをタイプに復刻し直している。昨年末にその第一巻を「根室、その水の青、森の緑」として自費出版した所であるが、その第二部の復刻にとりかかっている。「知床横断道路とかかわつて」の章からとりかかっているが、私が知床横断道路にかかわり始めたのは、着工から十年経過した昭和四十八年頃であった。十年たつても陸橋翔雲橋の橋脚を作つていた最中、組織立つた運動を開始しはじめたのが昭和五十年、その時には既に建設反対運動としては成立できなかったのである。

この経験からすると、千歳川放水路計画反対運動はまだこれからでも遅くない。少なくとも、北海道を愛し、その自然の豊かさ貴さを感じる人々の結集を図り、心をよせ合い、お金を出し合えばこの計画を白紙撤回させることは可能であらう。

〔千歳川放水路を考える会・会長〕

〔参考文献〕

北海道開発局石狩川開発建設部・千歳川の治水対策

北海道開発局 千歳川放水路昭和60年度調査について 昭和62年2月

千歳川放水路環境調査 昭和62年6月

千歳川放水路計画について

北海道自然保護協会・北海道の自然―湿原特集 第22号 昭和58年

八木 健三・千歳川放水路、その問題点は何か

「北海道の自然」No.26別刷 昭和61年6月

内山 勝人・野鳥の聖域ウトナイ湖があぶない

千歳川放水路問題についての年表

大畑 孝二・千歳川放水路問題を考える

アセスメント年鑑昭和62年版別刷

千歳川放水路を考える会・放水路はいらない！

一・二号 我々が大地を永遠に

三浦 二郎・千歳川放水路はいらない

北海道自然保護連合 北の自然第33号